11　次の文章は、『曽我物語』の一節である。十郎と五郎の兄弟は、父の敵・工藤を追って、鎌倉から宇都宮に入った。曽我兄弟は、源と行動を共にしている工藤祐経をねらうものの、警護が固く、敵討ちの機会が無い。頼朝の宇都宮は、三日目に入った。これを読んで、後の問いに答えよ。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〈広島大〉二〇二〇年度出題

　かくて、三が日ありけり。の人々は、河原の末の小家を借りて居られける。夜は出でて敵を狙ひ、昼は宿へぞ帰りける。宿の女房、四十四、五と見えたるが、娘の二十二、三なるに、一具、口包ま①せて人々をもてなしけるが、「家こそ候ふに、これほどに見苦しげなるの小屋に立ち入ら  
②せ給ふこと、これもるべきことにて候ふ。このほど物越しに見参ら③せるに、何となく物思ふ体におはしますこそ痛はしく覚え侍れ。それそれ、御酒申せ。若き御前たちは、おほよそ心なくして、御酒申すやうも知らぬぞとよ。、御酌に参らん」とて、に酒を入れ、を盤に据ゑて、十郎が前にぞ向ひける。十郎、盃を取り、三度飲みて、「御酌にらせん」と言ひければ、娘立ちて酌を取る。この女房、三度飲みて五郎にさす。五郎も三度飲みて置きたりければ、この女房、提を取つて、「和御前、召せ」とて娘にさす。娘も三度飲みて、五郎が前にぞ置きたりける。

　その後、酌をば娘に渡し、座席に居直りてａ語りけるは、世の中に物思ふ者多く侍れども、ア妾に過ぎたる者よもあらじ。その故をいかにと申すに、幼少の時は、に憎まれ、なさぬ仲の悲しみ絶えざりき。盛りなる時は、夫の命に背かじと朝夕営み侍りし中に、男子一人、女子一人、けし。妾が年三十七の時、夜討のために夫と子を失はれ、その嘆きいまだまざりしに、、不慮に敵の首を目前に見ることあり。その時の喜び、天へも上るばかりにこそ侍れ。それも今思へば罪業ぞかし。イ由なき事を思ひけり。今はただ念仏の一遍なりとも申して、亡き人どもの為にと存じてこそウ過ぎ行きへ。かたがたの御有様を見参らするに、エいとほしき御事にこそ侍へ。「唐の陽亭、父に別れて泣きし涙、時雨の森にまりし」と承る。さればの歌に、

　　Ａ　嘆きこそ繁き森にはまさりけれ別れし親の跡の玉垣

　玉垣とはのことにて侍ふなり。後漢の渓仲は、父に別れてに入る。が歌に、

　　Ｂ　嘆き行く森の下草枯れなまし漏り来し雨の露のなければ

　我が朝にては、の玉若が父に別れし悲しみ、山鹿の姫が母に後れし嘆きも、皆これ、夢幻の恨みにて、さてこそ過ぎ侍ひし。それよりただ御酒うち召して、御心を取り延べさせ給ひて、御帰り候ひて後、田舎のが、が旧床の有様も、鎌倉中にて御物笑ひの種ともなし給へと言ひながら、袖を顔に当てければ、ｂ兄弟も共に涙ぐみてぞ見えける。

　十郎、

　　Ｃ　嘆きこそ千草の花に身をなして忍べど色はれにけり

五郎もの袖を顔に当てけるが、さらぬ体にもてなして、

　　Ｄ　紅の末摘花の色見えて物や思ふと人の問ふかな

女房これを聞きて、「〔　　あ　　〕、物思ひ給ふ人々にておはしけり」とて、

　　Ｅ　野辺に立つ千草の花の色なれば忍べどに顕れにけり

娘も、持ちたる提を膝より下にさし置きて、

　　Ｆ　もとよりも嘆きの花の色を見て我もろともに袖ぞ露けき

各々、語り慰みて、旅の思ひ出にぞなしにける。

（『曽我物語』による）

注　瓶子……酒を入れて杯に注ぐ器具。とっくり。

提……つると注ぎ口のついた金属製の小型の器。

なさぬ仲……ここでは、義理の親子の間柄。

末摘花……紅花（べにばな）の別名。古名。

問１　二重傍線部①～③の「せ」について、それぞれ文法的に説明せよ。

　　例　存続の助動詞「たり」の連体形活用語尾

問２　傍線部ア「妾に過ぎたる者よもあらじ」、イ「由なき事を思ひけり」、ウ「過ぎ行き侍へ」、エ「いとほしき御事にこそ侍へ」を、現代語訳せよ。

問３　波線部ａに「語りけるは」とある。

１　誰が語ったのか。本文中の漢字二字の一語で答えよ。

２　この発話の終わりはどこか。最後の五文字を抜き出せ（句読点を含む）。

問４　空欄〔　　あ　　〕に入る最も適切な語を次のａ～ｅから選べ。

ａ　さりながら　　ｂ　さすれば　　　ｃ　さほどには

ｄ　さればこそ　　ｅ　さはいへど

問５　ＡとＢの歌について、次の問いに答えよ。

１　Ａの歌は、何を嘆いているのか。簡潔に答えよ。

２　Ｂの歌の「雨の露のなければ」を、「雨の露」が何を指しているかを明らかにして、現代語訳せよ。

問６　Ｃ～Ｆの歌には、すべて「色」が用いられている。

１　Ｃ～Ｆの歌で、「色」となってあらわれるのは何か。本文中のもっとも適切な一語で答えよ。

２　Ｄの歌を本文から取り出すと、「しのぶれど色に出でにけりわが恋はものや思ふと人の問ふまで」（『拾遺集』恋一、平兼盛）をふまえた恋の歌として解釈できる。その場合のＤの歌の現代語訳を書け。

◎問７　波線部ｂに「兄弟も共に涙ぐみてぞ見えける」とある。兄弟は、なぜ泣いたのか。簡潔に答えよ。

問８　宿の女房は、十郎と五郎にどうするように勧めているか。本文全体をふまえ、三十字以内で答えよ（句読点を含む）。

【解答と採点基準】

問１　①＝使役の助動詞「す」の連用形

　　　②＝尊敬の助動詞「す」の連用形

　　　③＝サ行下二段活用の動詞「参らす」の連用形活用語尾

問２　ア＝Ａ私Ｂ以上に思い悩んでいる者はＣ決していないだろう。

Ｃができていなければ全体０。

Ａ＝２

Ｂ＝３〔「物思ふ」ことが「過ぎたる」だとわかれば可。〕

Ｃ＝５

イ＝ＡつまらないことをＢ思ったものだよ。

Ａができていなければ全体０。

Ａ＝８

Ｂ＝２〔「けり」が詠嘆になっていないものは減点２。〕

ウ＝Ａ日々を過ごしてＢおります。

Ａができていなければ全体０。

Ａ＝５

Ｂ＝５〔命令形になっているもの、丁寧語で訳せていないものはそれぞれ減点２。〕

エ＝Ａお気の毒なことでＢございます。

Ａができていなければ全体０。

Ａ＝５

Ｂ＝５〔命令形になっているもの、丁寧語で訳せていないものはそれぞれ減点２。〕

問３　１＝女房　　２＝もなし給へ

問４　ｄ

問５　１＝Ａ父とのＢ死別。

Ｂができていなければ全体０。

Ａ＝５〔「親との」でも可。〕／Ｂ＝５

２＝Ａ泣きすぎて私の涙がれたように、Ｂ漏れて来る雨の滴がないので。

ＡとＢで「雨の露」が「私の涙」であることを説明できていないものは全体０。

Ａ＝５〔「泣きすぎて」「悲しみのあまり」などがなければ減点２。〕

Ｂ＝５〔「ので」ができていないものは減点２。〕

問６　１＝嘆き

２＝Ａ紅がはっきり見える末摘花のように、私の秘めた恋心も顔色に出て、Ｂ恋に思い悩んでいるのかとＣ人が尋ねることよ。

Ａができていなければ全体０。

Ａ＝４／Ｂ＝３

Ｃ＝３〔詠嘆の訳ができていないものは減点２。〕

問７　Ａ説得する女房のＢ身の上話や故事に共感し、Ｃその気遣いに心打たれたから。

Ａ・Ｃがなければ全体０。

ＡとＣ＝６／Ｂ＝４

問８　Ａ酒を飲んでＢつらさを和らげ、Ｃ鎌倉へ帰るように勧めている。（27字）

Ｃがなければ全体０。文末は「帰るのがよい。」なども可。

Ａ＝２／Ｂ＝３／Ｃ＝５

【現代語訳】

　こうして、三日間ご逗留なさった。曽我の人々は、河原の下手の小家を借りて（そこに）いなさった。夜は外に出て敵を狙い、昼は宿へ帰った。宿の女房で、四十四、五歳と見えた女が、娘で二十二、三歳である者に、とっくりをい、注ぎ口を（飾り紙で）包ませて人々をもてなしたが、「家は数多くありますのに、これほどに見苦しい感じのみすぼらしい小屋に立ち寄りなさることは、これもそうなるはずの縁によるものでございます。このたび物越しに拝見致しますと、何となく思い悩む様子でいらっしゃるのが気の毒に思われます。さあさあ（娘よ）、お酒を差し上げなさい。若い娘さんたちは、総じて気が利かなくて、お酒をお勧めする仕方も知らないことだよ。私が、お酌に参りましょう」と言って、提に酒を入れ、盃を盆に載せて、十郎の前に向きあった。十郎は、盃を取り、三度飲んで、「（お返しに）お酌に参りましょう」と言ったところ、（代わりに）娘が立って酌を受け取る。この女房は、三度飲んで五郎に勧める。五郎も三度飲んで（盃を）置いたところ、この女房は、提を手に取って、「そなたも、召し上がれ」と言って娘に勧める。娘も三度飲んで、（盃を）五郎の前に置いた。

　その後、（女房が）酌を娘に任せ、席に座り直して語ったことには、「世の中に思い悩む者は多くおりますが、問２ア私以上に思い悩んでいる者は決していないだろう。そのわけはどうかと申しますと、幼少の時は、継母に憎まれ、義理の親子の悲しみが絶えなかった。年頃のときは、夫の命令に背かないようにしようと朝夕勤めましたうちに、男の子一人、女の子一人を、もうけた。私が三十七歳のとき、夜討ちのために夫と子を殺され、その嘆きもまだおさまらなかったうちに、一昨年、思いがけず（処刑された）仇の首を目の前で見ることがある。そのときの喜びは、天へも上るほどでございます。それも今思うと罪業だよ。問２イつまらないことを思ったものだよ。今はただ念仏の一度であっても唱え申し上げて、亡き人々のために（祈ろう）と思い申し上げて問２ウ日々を過ごしております。あなた方のご様子を拝見しますと、問２エお気の毒なことでございます。『唐の陽亭が、父に死に別れて泣いた涙は、時雨の降る森に残った』とお聞きする。それだから（紀）貫之の歌に、

　私の嘆き（の涙の多さ）は、木の生い茂る森以上（に多いの）です。死に別れた親の名残の廟堂の前では。

　玉垣とは廟堂のことでございます。後漢の渓仲は、父と別れて仏道に入る。凡河内躬恒の歌に、

　（私が）嘆きつつ歩いてゆく森の下草は枯れるだろう。問５２泣きすぎて私の涙が涸れたように、（天上の水も涸れて、森の木の葉を）漏れて来る雨の滴がないので。

　この国では、柴田の玉若が父と死に別れた悲しみ、山鹿の姫が母に死におくれた嘆きも、これはみな、夢幻のような（はかない）嘆きであって、（多くの人々が嘆きつつも）それはそういうこととして時が過ぎました。（だからあなた方も）思い悩むよりもただお酒を召し上がって、お気持ちを楽にしなさって、お帰りになりました後は、（この）田舎のつまらない者の住まいや、無骨者の古い寝床の様子も、鎌倉中でご談笑の話題としてください」と言いつつ、袖を顔に当てたので、兄弟もともに涙ぐんでいるように見えた。

　十郎が（詠む）、

　様々な花の中の一本にこの身を変えて、目立たないようにしていたが、心中の嘆きは表れ出てしまうことだなあ。

五郎も直垂の袖を顔に当てていたが、何でもないようにふるまって、

　問６２紅がはっきり見える末摘花のように、（私の）秘めた恋心も顔色に出て、思い悩んでいるのかと人が尋ねることよ。

女房はこれを聞いて、「思ったとおりだよ、思い悩みなさる人々でいらっしゃるのだなあ」と言って、

　野辺に咲く様々な花の色のようにはっきりとした（あなた方の）心中の嘆きなので、内に秘めても最後には表れ出てしまうものだよ。

娘も、持っている提を膝から下に置いて、

　早くから（あなた方の）「嘆き」という木の花の色を見てとっていたので、私も一緒に（泣いてしまって）袖が（涙で）湿っぽいことです。

それぞれに、語りあい心慰めて、旅の思い出にしたのだった。